

入選 岐阜県 原田 晋太郎 様 (高校生 男性)

二年前、僕の母は亡くなりました。

僕が中学校二年生だった夏のことです。その日、学校が終わり気分良く家に帰ると、いつもは離れて暮らしている祖父母と、父が悲しげな顔をしてイスに座っていました。何事かと思い父にたずねると母が仕事中に倒れたとのことでした。医師からはもう助からないと言われたそうです。そして母が倒れて一週間後、母は帰らぬ人となりました。僕は十三という歳で年金受給者となったのです。

僕の家は自営業をしており、ペンションを経営していました。僕の母は休日には看護師もしていて、父と母の二人の頑張りによって生活をしていたのです。そのため、家族の大黒柱が突然いなくなってしまったような、そんな感覚でした。ペンションでは従業員を雇っておらず、二人で何とか経営をしていたため母が亡くなったことは、ペンションの営業にも大きな影響を与えました。また、今まで通りの営業はできず、部屋の数を減らすなどして、規模を縮小しなくてはなりませんでした。そのため、僕の家の収入はペンションの規模の縮小と母の看護師でのかけががなくなったことで激減してしまったのです。

母が亡くなつてから少し経ち、この現状を知った僕は少しでも父の迷惑にならないようと、お金に関わることに対してとても気をつかうようになりました。当時僕は、中学に入学してから塾に通っていました。母が亡くなる前から、毎月塾の方から渡される月謝袋に書いてある値段を見て、「こんなに高いお金を出してもらって大丈夫なのかな。」と思っていた僕ですが、このような事態になったことで、より一層、その塾代の高さを心配するようになりました。

そしてある日僕は、父に「塾つかれるしやめようかな。」とつぶやきました。小さい頃から遠慮がちな僕だったため、僕がお金に関して心配しているということに気づいたのでしょうか。父は僕に「自分のためにもなるから通え。お金も母さんからもらった分があるから大丈夫だ。」と言ってくれました。

その時「母さんからもらった分」という言葉に疑問を持った僕は、父に「どういうこと?」と尋ねました。これをきっかけに僕は遺族年金について知ったのです。この遺族年金につ

いて知った僕は、自分の心に余裕ができ、それと同時にこれからも勉強を頑張ろうと思うことができました。それからの僕はこの年金について知る前より真剣に、また精一杯塾や学校の授業に取り組むようになりました。

これらの出来事があって二年の月日が経った今、高校受験に無事合格をし、第一志望であった市内の私立高校に通うことができています。今でこそ高校に入学できて当たり前という考え方になってきている世の中ですが、高校という場所は義務教育を終えた人達の行く場であり、毎日通うことができてるのは当たり前のことではないのです。今まさに高校生、または大学生である人達は親に感謝をしなくてはならないと思います。

そんな中でも僕は、母が亡くなりそして遺族年金について知るという経験があるからこそ周りの人達よりも、親に感謝をしている自信があります。僕が高校に通えるように一人でも一生懸命仕事をして学費を出してくれている父ですが、そんな父に対して感謝を伝える一番の方法は、これからもしっかり勉強をし、良い大学に入って自分の夢を叶えることだと思っています。これを実現するためにも一日一日を大切にして過ごしていくよにしたいです。

僕のような不幸にあってしまった子供でも、これから的生活に希望をもたせてくれる。それが年金です。今回の事では助けてもらう側にいた僕ですが、あと数年も経てば成人して、年金を納めることができる年齢となります。その時には、僕と同じような境遇にあつてしまふ人達を救う気持ちで、社会に貢献できるような大人となり、年金を納められるようにしたいです。